

〈エッセイ〉

アイドル活動と勉強、研究

Balancing Idol Activities with Study and Research

和田彩花

Ayaka Wada

私は9歳からアイドルの研修活動をはじめ、15歳でデビューしてからというものアイドル活動と学業を両立する学生時代だった。

「仕事と学業の両立は大変でしょう？」ともう何回聞かれたかわからないほど、たくさんの方に声をかけてもらってきたが、私はどちらかを諦める、辞めるなんて考えたこともないくらいに、仕事と学業の両立を前向きに捉えていた。というのは、ちょっと美化しすぎだろうか。私にとって勉強というのは、単に好きなことを追求するってことでしなかった気がする。

アイドル活動と学校以外のほとんど時間を美術館での絵画鑑賞に充てていた私は、高校2年生になるころには、大学で美術史を勉強したいと強く思っていた。

アイドルを続けながら大学に行きたいと思えたのは、2人の先輩が仕事をしながら大学へいく道をつくってくれたことと、当時出演していたNHKの受験番組で大学や大学生を身近に感じられる環境があったからだ。

大好きな美術の歴史を勉強できるかもしれない未来は、私にとって大きな夢と幸せを与えた。

実際はというと、夕方から仕事に行かなければいけないので、1限から3限までに授業を終えるようにスケジュールを組み、4限終わりは走って仕事へいった。そして仕事が終わった後の21時以降に学校の課題をこなした。

先生方は、私の仕事について認識していたものの、他のみんなと同じように一学生として指導してくれた。

周りに良き理解者を持ち、楽しみながら勉強に励んだおかげで、学部時代は単位を落とすことがなく、4年で卒業した。

大学で美術史を勉強していた時間はとても幸せだったけど、なんだか物足りなかった。高校生のころからいろんな美術作品をみていた私は、もっと深く勉強したいと思うようになっていた。

なので、大学院に進むことにした。学部時代と同じ美術史学専攻だ。

大学院は自分にとってどんな場所だったのだろうか？美術の知識はもちろんだけど、もっと普遍的なのに奥深く、人に欠かせない大切なことを学んだような気がする。

大学院を修了してまず思ったのは、世界が見えてくるってことだった。この世界の輪郭、どう成り立っているかを少し理解できるようになった。そして、世界の出来事を自分1人で考え、言葉になんとか出せるようになったのだ。

反対にそれまでの私は、この世界がどう成り立っているのかわからずにいたし、目の前の事象について1人で考えて答えをもつことができなかった。

大学院の授業では、各々が研究テーマの進捗を毎回発表することがあった。その授業の先生は、作品についてどう思うかを少人数のクラスで一人一人に聞いた。そして、誰の答えも否定しなかった。

先生と展覧会に行ってもいつもそうだった。どう思った？といつも感想を聞きだしてくれて、全てを肯定してくれた。

自分の意見をもつ、いう、またそれは否定されず私の意見として守られるものであり、批判とはまた別のことなのだと学んだ。

先生の講義を受ける時間ですらも発見でいっぱいだった。

モネは睡蓮を描いたことで有名で、画面には水面が描写されることが多い。しかし、先生の語り口は、モネがどんな環境で、どうやって実際に自分の手を動かし庭仕事をしたのかということから話を始めるのだ。

物事の根本的な部分や、見過ごされがちな前提をあらためて見直す姿勢は、先生から学んだことだとはっきり思う。

それから、先生は言葉を発するときに、その言葉が適切かどうかを考えながら話しているようだった。先生がどうこの絵画を形容するのか、どんな言葉に置き換えるのかいつも耳を傾けた。

美術の授業ではもちろんあるが、どのように美術作品を言葉にし、伝えるかの訓練をしているようでもあった。

あるとき、「仕事との両立で忙しいのはわかるのだけど、和田さんのレポートはいつも急いで書いたように感じる」と先生に指摘された。続けて、時間を忘れて絵画を見ること、忙しいなかでも生活のどこかにゆとりを作る意識をもつことアドバイスしてもらった。

はじめて仕事と学業の両立の難しさを感じた瞬間だった。

それまではいかにスケジュール通りに課題と仕事を終わらせるか、いかに隙間時間を有効活用できるかばかり考えていた。2時間でも空いた時間があれば美術館へ足を運んでいたが、仕事を忘れて美術作品に没頭できる時間、環境づくりを心がけるようになった。

またある日は、発表が近くピリピリしている私たちのために、研究テーマと全く関係のない古本を買ってきてくれた。この本を読んでみてほしいとさまざまな本をすすめてくれる時間もあった。

簡単に言ってしまうと、「どう考えて、どうそれを言葉にし、人に伝えるか」の全てを大学院で学び直したといえる。

けれど、それだけではない。先生は、いつも私の状態をみては、視点や考え方、負担の切り替え方をこっそりと教えてくれた。

学校は、先生から一方的に知識を教わる場のように思うけど、大学院ではいつも先生の姿や言葉選びからたくさんの学びを得た。

素敵な先生方が近くで指導してくださったことは、人生の財産となった。

アイドル活動は、学校の友達たちが経験できない特別な時間なのだと教えられていたように思う。しかし、アイドル活動は教育の代わりにはならないし、本来受けなければいけない義務教育すらもおろそかになってしまう現実を受け止めなければいけない。

私がいたアイドルの世界では、決められた良し悪しの範囲で行動するような環境だった。そのような環境では、自分で考える時間はあっという間に奪われてしまう。

学歴が全てとはもちろん思わないけれど、自分で考え、意見をいう力をもつことがもっと広く重視されてもいいのではないだろうか。まだまだ、アイドルが（若い女性が）意見をいうなんて、わがままだといわれてしまう世の中であるからこそ。

私は、自分で考える力を持って、アイドルの世界の前提とされているルールや良し悪しに対して問題提起できるようになったし、それを発信することの意味や意義を感じながら今の活動をしている。

もちろん人によって性格や得意不得意はあるとは思いますが、それでもなるべく自分で考え、責任を持って、生活していくこと、人として生きることを考えたい。

それが学校という場でなくてもきつとよくて、今生きている、または当たり前にある環境の外で、自分という存在に向き合える時間が誰にでも必要だ。私はその時間を、大学院で過ごした。

